

## 【序章】

1998年自国開催のW杯で優勝したフランスは、実に70%近くの選手が移民系選手で構成されていた。このチームが優勝したことで、フットボールが国家を統一したと言われ、アルジェリア移民系であったジダンはフランスの、移民の英雄として祭り上げられた。

近年フットボールは、試合によっては社会にとっても単なるスポーツ以上の存在となっており、社会にまで影響を与えることも少なくない。

本論文ではフットボールの持つ社会への影響力について、フットボールが社会問題とも結びついているフランスを対象とし、代表チームの成績、それに対応する政局の変化を調べること、フットボールが政局にまで影響し実際に社会を変えうるものなのかを明らかにしていく。

## 【1章】

現代のフランスにおける移民社会は、大量の闖入ではなく、継続的な注入で作られてきた。この長い間の移民受け入れは多くの移民出身者を生み、現在では地域的な集中からくる移民問題に直面している。多くの移民出身者が住む郊外では、フランス平均失業率の3倍近い失業率となっており、治安、教育環境ともわるい。彼らは見た目や名前から日常的に差別を受ける場面も少なくなく、警察からも加害者として見られる。サルコジ内相は犯罪率増加を解決すべく、治安回復に躍起になりある程度の数字を残したものの、その強い締め付けは2005年の暴動につながってしまう。

## 【2章】

フランスフットボールは移民系選手抜きには語れない。制度上の敷居も低く、代表でも時代を問わずその中心だった。

フランスフットボールはその移民との関わりの強さから、常に移民問題という社会問題とも関わってきた。1998年W杯では多くの移民系選手を抱えた代表が優勝したことにより、フットボールが国家を統一したといわれ、2001年のフランス対アルジェリアではフランス国歌に対するブーイングが起きた。育成年代における選手規制も移民系選手が必ず関わるため、社会も敏感に差別問題と結び付ける。フランスフットボ

ールは常に社会問題と関わっていくのだ。

## 【3章】

社会問題と関わっているフランスフットボールは、フランス社会にどの程度の影響を与えているのか。1982~2008年における代表の国際大会での成績、各大会直近に行われた選挙における国民戦線の得票率とその選挙でのトップの得票率を得た政党、選挙直前の失業率のデータの相関関係を調べることで、その影響力を明らかにしていく。移民出身者の集団と認識されている代表の成績が良ければ、移民排斥を公言している国民戦線の得票率は下がるのではないかと、あるいは代表の成績が悪いときにその逆があるのではないかとという仮定のもと進めていった。

## 【4章】

ここまでフットボールの数字に現れる影響力を見てきたが、当然数字に表れないものもあるので、それをみていく。

98年のW杯による感動は一過性のものであったが、結果を残すということは影響力が出るということだ。移民系選手であるジダンやデサイー、テュラムは移民排斥に対する反対を唱え、CMや演説、組織の中での行動など様々な形で意見を言っている。またフランスの移民出身者にとってフットボールは、目標となる選手がいることから、自らの夢になり、また教育のツールともなっている。

## 【終章】

代表の結果が政局にまで影響することはあるという結果が出て、フットボールのフランス社会における影響力の大きさが分かったわけだが、フットボールが社会に与える影響というと、とかくポジティブなものが紹介されるが、本論文で明らかになった影響力は「代表が負けると移民排斥の気運が高まる」というネガティブなものだった。

フットボールは社会にとって、試合によって吐き出される感情を大きくする装置であり、それは感情の良し悪しに関わらず行われる。フランスフットボールのように社会問題と関わっている場合、その感情は社会を変えるほどに大きくなることもあるのではないかと。